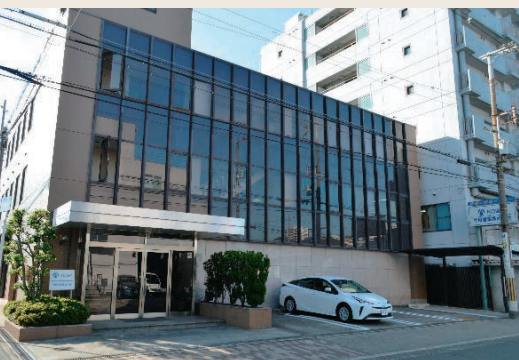


『安全への道標 (みちしるべ)』をスローガンに 安全安心な道路環境を提供します 光和産業 株式会社



光和産業 株式会社

代表取締役社長：青龍 和浩 氏
所在地：大阪市平野区西脇2-6-17
設立：1961年（昭和36年）
従業員数：20名
事業内容：道路標識の製作及び施工



私たちの生活において道路は、都市の繁栄や地方の発展の軸となり、人々の生活に不可欠なものです。光和産業は昭和26年の創業時より、このような道路標識の今日における役割と重要性を感知し、多年にわたって築いた高水準な技術と品質には各界から高い評価と信頼を得ています。

今回は代表取締役社長の青龍和浩氏にお話を伺いました。

— 創業から現在までの変遷

当社は昭和26年8月に道路標識の製作・販売・設置工事を目的として日本スコッチライト(株)という社名で創業しました。戦後の自動車の普及を見込んでのスタートです。昭和31年に日本道路公団が設立されて反射シート(写真1)の標識が採用されたことを契機に仕事が増え、その後も地元密着型の企業として大阪を中心として近畿圏内の多くの標識を手がけてきました。



写真1：反射シート

当社の成長のきっかけとして、3つの大きなイベントがありました。1つ目は昭和45年の大阪万博の開催です。開催に伴い、千里方面の交通インフラが整備され、新御堂(国道423号)や大阪中央環状線(大阪府道2号)などの新しい道ができました。その時に最も多く生産したのは青地に白文字タイプの案内標識(写真2)です。他にも信号機の上にある交差点標識(写真3)も多く生産し、千里方面を中心に円状に道路標識が増えていきました。

2つ目の大きなイベントは平成2年の国際花と緑の博覧会(花の万博)の開催、そして3つ目の平成6年、関西国際

空港の開港です。新しく道路が増えるごとに案内板と標識を導入し、地域のために大きな貢献をしています。



写真2：案内標識



写真3：警戒標識

最近の最も大きなイベントですと、TOKYO2020オリンピック・パラリンピックです。5年ほど前から国土交通省の通達により高速道路の路線名に併せて路線番号を用いて案内する「ナンバリング」(写真4)が導入されました。また、インバウンド対応の一環でローマ字表記の英字への変更もあり、訪日外国人をはじめ、すべての利用者にわかりやすい表示となっています。

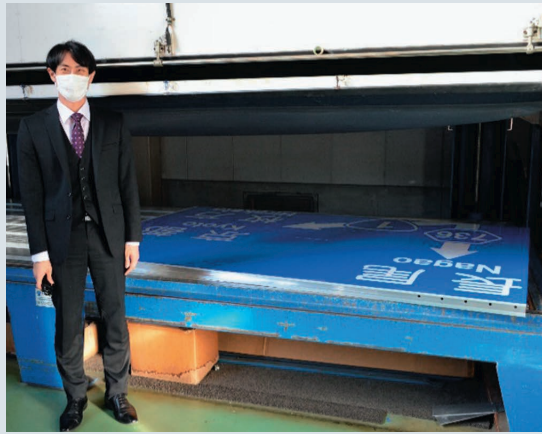


写真4：高速道路の表示

また、平成29年の標識令の改正に伴い、『一時停止』や『徐行』の規制標識(写真5)の下に英字を入れる事業も行いました。しかし昨今のコロナ禍等のあおりを受け規制標識の変更は本来の計画通りには進んでおらず、まだ目



青龍社長と指示標識（横断歩道）



事務局職員（身長177cm）と
製造途中の案内標識（縦半分サイズ）

近づいてみると意外と大きい!?

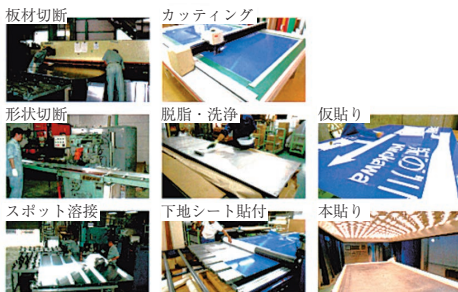
道路標識は高い位置に設置されているので、近づいてみると想像よりも大きくて驚きます。また、大阪市の案内標識は規定で寸法が2400cm×3000cmの7.2平米と決まっており、重さはおおよそ150Kgとなります。基板はアルミでできているため錆びず、30年経っても問題なく立っています。もちろん、今まで一度も落下事故は起きていません。

にする機会は少ないかもしれませんが。



写真5：英字表記入りの標識

— 標識の製造工程と 品質維持の取り組み



当社の仕事は自動化されていると思われる方が多いと思いますが、製作工程の大半は手作業で行われています。設計図書をもとに現場調査を行い、レイアウト図を作成します。役所から承諾を得ると、協力会社から納入したアルミ基板を脱脂洗浄し、脂をきれいに取り除いてからローラーで下地の反射シートを貼り付け、その上にカッティングした文字や記号をレイアウト図の通りに手作業で貼り付けていきます。文字のカッティングはプログラムによる機械作業ですが、それ以外はすべて熟練の職人が決してミスのないように仕上げています。当社の製品である標識は、

皆様が目にする公共のもので、ミスは絶対に許されません。そのために、作業者の教育や、徹底した品質検査、作業履歴の記帳など、品質の維持に努めています。

— お客様の声を元にした製品開発

当社の製品開発について1つお話をさせていただきます。平成11年に開発した逆光対策標識（写真6）です。高速道路の出口の標識が西日で見えず通り過ぎてしまったという声や、通り過ぎてバックする車による事故発生を防ぐために開発しました。この逆行対策標識の開発により、NEXCO関係の仕事も多くいただきました。



写真6：逆光対策標識（左）
一般的な標識（右）

普通の標識は前述の製造方法通り、反射シートにカッティングした文字を貼り付けていますが、逆光対策標識は文字の部分をレーザーで切り抜き、裏に透明なメタクリル樹脂板を貼っています。逆光時に切り抜き部分から太陽光を透過させることで、運転中のドライ

バーの視認性を確保します。すでに多くの高速道路に設置、特に新名神高速道路には多く採用されています。

逆行対策標識は全ての箇所に設置するのではなく、専用のシミュレーションソフトを使って逆光の程度や太陽の軌道計算、ドライバーの動体視野などから総合的に判断し、必要と思われる場所を特定、提案し、製作しています。

— 今後取り組むべき課題

現在は近畿圏内が中心ですが、販路拡大のために本社を起点に少しずつ営業先を広げています。また、標識の老朽化に対応するため、標識の立地点をすべて平面図に落とし込み、経年劣化している標識のチェックや立て替えを提案できるようにしていかなければいけません。

さらに、2030年代にはおそらく自動運転車両の普及が進み、標識の数も減っていくでしょう。依頼されたものをただ作るのではなく、例えば標識にセンサーをつけたり、ナビゲーションとタイアップしたり、自動運転化の潮流に乗り遅れないための技術力を高めていくつもりです。今後も、一層の技術の研鑽と品質向上にたゆまぬ努力を続け、道路交通の発展に貢献します。

— 貴重なお話をいただき、
誠にありがとうございました。